

大学生の体育実技に対する態度

西 村 覚*

Satoru NISHIMURA

The Attitudes of University Students toward
Physical Education Activity

I. はじめに

癌や、心臓病、脳血管疾患といった成人病の予防に対する運動の効果が広く一般に知られるようになった結果、今日、健康のための運動に対して多くの人々が注目している。様々なスポーツクラブや運動施設が人々で埋め尽くされていることから人々の関心の高さを知ることができよう。しかし、運動が健康に及ぼす効果（肥満の防止、高血圧の予防等）は知っていないながらも、自分では運動を行わずにいる人も多いようである。これらの人々が運動を自発的に実施するにはたらきかけることは、運動のための環境を整えることと共に重要であると考えられる。ではどのようなたらきかけが効果をあげるのだろうか、自発的に運動しているかどうかは過去の運動部参加経験の有無と大きな相関があることが報告されている。¹⁾これは、運動部に参加して、運動の技能や実施するための態度が養われたためではないかと考えられている。人の運動に対する態度はおおむね好意的であると言われており、運動をとくに避けている人は少数である。日常特に運動を実施しておらず運動に対する態度が比較的非好意的な人も、運動を実施することによって運動に対する態度が好意的に変化したという報告もある。²⁾このことから、学生時代に定期的に運動を実施することには、社会に出た後も運動を自発的に実施し、継続していくうえで大きな影響をもつと考えられる。その点において社会に出る直前の大学、高校における学校体育実技の果たす役割は特に大きいと考えられる。

ところで、大学における一般体育は設置基準の改訂などにより各大学独自のカリキュラムによる自主的なものへと変更されつつある。これにともない、現在の大学の

一般体育のあり方を見直す必要に迫られている。見直しのための視点としては様々なものが考えられるが、まず学生自身が現在の大学の一般体育に対してどのような態度をもっているのかを把握することが改革を考える上で重要であると考えられる。そこで、今回は大学の体育の授業、特に一般体育の実技に対して学生がどのような態度をもっているのかを明らかにし、さらに同様受講してきている高校の体育の授業に対する態度と比較することによって、大学の一般の体育実技の特徴及び問題点を探り、内容、実施の方法等について考えるうえでの資料とした。

II. 方 法

質問紙調査により大学の一般体育実技受講生に対し高校時代の体育授業に対する態度、大学の一般体育実技に対する態度を調査し、それらを比較検討することによって大学体育の問題点を明らかにしようとした。

調査対象はS大学一般体育実技（1年生対象）受講生765名（男子498名、女子265名、不明2）。

調査は、平成2年11月8～22日の期間に一般体育の授業時間を利用して実施した。

調査では、体育の授業に対する意見調査として高校、大学それぞれの体育の授業に関する30の意見に対して、「賛成」、「反対」、「どちらとも言えない」の3者択一で回答を求めた。高校、大学の各30項目は同じ質問とし、計60問の質問を行った。質問項目は小林ら³⁾が体育の授業診断のために作成した項目を参考に作成した。30の質問項目は体育の授業の場での喜びを計る尺度「運動の喜び」、授業内容に対する評価の尺度「授業内容の評価」、体育の授業に対する価値観を計る尺度「体育授業に対す

* 島根大学教育学部保健体育研究室

る価値観」の3つの下位尺度からなり、各10項目、計30項目からなっている。

各質問項目において体育の授業に対して好意的な回答には+1点、非好意的な回答には-1点、中間的な回答には0点を与え、各項目ごとの平均点を項目点とした。30の項目点の合計を高校、大学それぞれの体育の授業に対する態度得点とした。また、3つの下位尺度ごとにも得点を集計し、それぞれ、「運動の喜び得点」、「授業内容の評価得点」、「体育授業の価値得点」とした。これら得点がプラスに大きいほどそれぞれの項目及び尺度に関して体育の授業に対する態度は好意的であると解釈した。

さらに、同一の項目において男子と女子、高校と大学それぞれの体育の授業に対する態度をこの得点を用いて比較検討した。同様に10項目ごとの得点の合計である、3尺度の得点（喜び尺度、評価尺度、価値尺度）においても同一尺度において男女間、大学高校間で各尺度得点を用いて比較検討した。各得点は全体の平均点であることから、同一項目間の得点の比較には平均値の差の検定による。計算は「『統計的検定と多変量解析』を行うためのソフトウェア」を用いて行った。以下の結果の中の値はこの項目点並びに有意水準である。

Ⅲ. 結果及び考察

体育の授業に対する意見の各項目の得点は表1、表2のとおりであった。

1. 高校の体育の授業に対する態度

1) 授業の場での喜び

体育の授業の場での喜びを表す喜び尺度得点は、3.19と好意的傾向を示した。男女別でも男子3.41、女子2.85と男子の方がやや高い得点を示したものの有意な差はなく、高校体育の授業において男女とも喜びを感じたものが多かったと考えられる。

項目別にみても、喜び尺度のすべての項目点はプラスであった。中でも5「集団活動のたのしみ」(0.62)を感じたものや、7「心身の緊張をほぐす」(0.53)ことを高く評価したものが多かった。他にも、体育の授業は1「快い興奮」(0.42)や3「生活のうらおい」(0.38)を与えると感じ、2「友達をつくる場」(0.42)として高く評価し、授業では10「喜びよりも苦しみ」(0.46)は少なく、教科の中で価値のあるものだったと6「体育科目の価値」(0.25)を高く評価したものの割合が高かった。

男女で比較した場合4「授業時間数」に関して男子は

表1. 高校の体育に対する態度得点 (N=765)

項目名	全体	男子	女子
1 (快い興奮)	0.42	0.41	0.45
2 (友達をつくる場)	0.43	0.42	0.43
3 (生活のうらおい)	0.38	0.40	0.34
4 (授業時間数)	0.07	0.16	-0.11 ***
5 (集団活動の楽しみ)	0.62	0.62	0.62
6 (体育科目の価値)	0.25	0.32	0.12 ***
7 (心身の緊張をほぐす)	0.51	0.53	0.48
8 (自主的思考と活動)	0.04	0.04	0.04
9 (積極的活動)	0.04	0.05	0.02
10 (喜びより苦しみ)	0.45	0.46	0.43
11 (深い感動)	-0.15	-0.20	-0.05 **
12 (精神力の養成)	-0.29	-0.32	-0.23
13 (キビギビした動き)	-0.24	-0.21	-0.28
14 (体力作り)	0.22	0.17	0.31 *
15 (協力の習慣)	0.09	0.03	0.21 **
16 (基本的理論の学習)	-0.19	-0.20	-0.18
17 (堂々ががんばる習慣)	-0.12	-0.13	-0.08
18 (明朗活発な性格)	-0.06	-0.09	0.02
19 (授業のまとまり)	0.22	0.19	0.29
20 (授業の印象)	0.07	0.01	0.19 **
21 (みんなの活動)	0.18	0.11	0.29 ***
22 (授業のねらい)	0.21	0.14	0.32 **
23 (永続的な仲間)	0.53	0.50	0.60
24 (教師の存在価値)	0.29	0.21	0.46 ***
25 (体育科目の必要性)	0.38	0.34	0.47 *
26 (理論と実践の統一)	0.08	-0.01	0.26 ***
27 (チームワークの発展)	0.30	0.21	0.48 ***
28 (主体的人間の育成)	0.53	0.50	0.58
29 (利己主義の抑制)	0.35	0.31	0.43 *
30 (みんなの喜び)	0.08	0.07	0.11
喜び尺度得点	3.19	3.41	2.85
評価尺度得点	-0.44	-0.77	0.21 **
価値尺度得点	2.94	2.39	4.00 ***
態度得点	5.61	5.03	7.06 *

***P<0.001, **P<0.01, *P<0.05

少なかったとしているものが多かったのに対し(0.16)、逆に女子は多かったと回答するものが多く(-0.11)男女間で体育の授業時間に対する態度に差がみられた(p<0.001)。また、6「体育科目の価値」についても女子(0.12)に比べ、男子(0.32)の方が体育は教科の中で価値のあるものの一つだと考える割合が高かった(p<0.001)。男子は身体を動かすこと、運動そのものに喜びを感じるのに対し、女子の体育授業の場における喜びは運動そのものではなく集団活動や、そのなかで得られる友人関係などに重点があると考えられる。これは男女の運動欲求の違いによるのではないだろうか。このことが体育の授業時間数に対する意見の違いに表われていると考えられる。

2) 授業に対する評価

授業内容に対する評価の評価尺度得点は全体で-0.44とマイナスであり高校の体育の授業内容に対する評価は低い傾向がみられた。個々の項目でも10項目中、11「深い感動」(-0.15)、12「精神力の養成」(-0.29)、13「キビギビした動き」(-0.24)、16「基本的理論の学習」(-0.19)、16「堂々ががんばる習慣」(-0.12)、17「明朗活発な性格」(-0.06)の6項目において項目得点はマイナスであり評価は低かった。中でも12「精神力の養成」

や、13「キビキビした動き」のできる身体をつくることはできず、運動のやり方だけで16「基本的理論の学習」はできなかったとしたものの割合が高かった。それに対し、14「体力づくり」(0.22)と、19「授業のまとまり」(0.22)に対しては評価は高かった。

男女別にみると評価尺度点は男子では-0.77とマイナスであるのに対し女子では0.21とプラスの得点となっており、男子は高校の体育の授業内容に対して評価がかなり厳しいのに対し、女子は体育の授業内容に対する評価は男子よりも高く ($p < 0.01$) や肯定的であった。

男女で差のあった項目をみると、体育の授業で11「深い感動」得られたとしたものは男子よりも女子が多かった ($p < 0.01$)。また14「体力作り」や15「協力の習慣」の形成に役立ったと評価したもの ($p < 0.05$)、「授業の印象」が長く残ったと評価したものの割合も男子よりも女子の方が高かった ($p < 0.01$)。女子は、「精神力の養成」や「キビキビした動き」の養成に対しては男子同様に評価が低かったが、男子よりも「体力作り」や「協力の習慣」の養成に対しては評価が高く、「授業の印象」も長く残るものであったと評価していた。女子は男子に比べ休み時間などに自発的に運動することが少ない。そのため体育の授業を身体を動かす数少ない場であり、体力作りに有効であると評価し、印象にも残ると考えられる。それに対し、男子は運動量の面などからは体力作りに対する評価は女子より低く、体育の授業に対しては理論面など女子よりもさらに高い次元を要求しており、その結果女子よりも授業内容に対する評価が厳しくなったと考えられる。

3) 授業に対する価値観

体育の授業の価値観についての項目は、全ての項目で得点はプラスであり価値尺度得点でも2.94とプラスであった。体育の授業について価値を認めているものが多かったといえる。なかでも、23「永続的な仲間」(0.53)や、25「体育科目の必要性」(0.38)、28「主体的人間の育成」(0.53)、29「利己主義の抑制」(0.35)などの得点が高かった。

男女別では、男子も2.39と好意的な傾向を示したが、女子の方が4.00とより高い得点を示した ($p < 0.001$)。

男女間に有無に差のあった項目は10項目中21「みんなの活動」、22「授業のねらい」、24「教師の存在価値」、25「体育科目の必要性」、26「理論と実践の統一」、27「チームワークの発展」、29「利己主義の抑制」の7項目であった。

26「理論と実践の統一」を除く6項目で、男子も体育

の授業の価値を認める傾向にあったが、女子の方が項目点が高くよりその傾向が強かった。全体として男女とも体育の授業に対する価値は認める傾向が強いが、その傾向は男子に比べ女子に強かったといえる。なかでも女子はみんなの活動やチームワーク、利己主義の抑制など集団活動の価値を高く評価していた。それに対し、男子は理論と実践の統一や、教師に対する評価が低く内容の価値に対する評価が厳しい傾向がうかがえた。

高校の体育の授業に対する態度は全体として好意的であった。授業では喜びを感じ価値を認めていたものの、内容に対する評価は低かった。特に男子にその傾向が強かった。それに対して女子は、喜び、評価、価値の全てにおいて好意的であった。男子は体育の授業は心身の緊張をほぐし、生活にうるおいを与えると評価するなど、女子よりも体育の授業において喜びを感じており、授業時間数に不足を感じ、価値のある教科の一つと考えていた。しかし、授業内容においては体力作りには役立つと評価しながらもその他の面では評価が低く、その結果として体育の授業に対する価値観が低くなったと考えられる。それに対して、女子は友達をつくる場や、集団活動の楽しみはあるとしながらも、男子に比べ体育の授業の場において喜びは少なかった。しかし、体力作りや協力の習慣を身につけるなどの点で、男子よりも評価が高く、その結果体育の授業に対する価値観も高くなったと考えられる。これは、小林⁴⁾による体育の授業に対する態度の構造は、授業における喜びから評価が生まれ、そして価値観が育つという解釈と一致する。

2. 大学の体育の授業に対する態度

1) 授業の場での喜び

体育の授業の場での喜び尺度得点は3.18と好意的であった。男子は3.11に対して女子3.21と女子の方が高得点であったが高校同様有意な差はなかった。

各項目の得点の傾向は高校の体育に対するものとはほぼ同様の傾向であり、なかでも2「友達をつくる場」(0.50)、5「集団活動の楽しみ」(0.58)、7「心身の緊張をほぐす」(0.47)、10「喜びより苦しみ」(0.57)の各項目で得点が高かった。「授業時間数」、「自主的思考と活動」、「積極的活動」に関しては得点は低かった。

男女別では高校と同様に「授業時間数」に対して、男子は少ないとしているのに対し、女子は多いと考えている傾向がみられた。「友達をつくる場」や「集団活動の楽しみ」の得点が男子よりも女子に高かった。

大学の場合、授業が高校と違い週1コマと少ない割には授業時間が少ないと回答したものは少なかったものの、

表2. 大学の体育に対する態度得点 (N=765)

項目名	全体	男子	女子
1 (快い興奮)	0.29	0.26	0.35
2 (友達をつくる場)	0.50	0.45	0.59 **
3 (生活のうるおい)	0.29	0.29	0.31
4 (事業時間数)	0.10	0.20	-0.09 ***
5 (集団活動の楽しみ)	0.58	0.55	0.65 *
6 (体育科目の価値)	0.24	0.27	0.20
7 (心身の緊張をほぐす)	0.47	0.48	0.46
8 (自主的思考と活動)	0.07	0.08	0.05
9 (積極的活動)	0.01	-0.01	0.07
10 (喜びより苦しみ)	0.57	0.55	0.62
11 (深い感動)	-0.28	-0.30	-0.25
12 (精神力の養成)	-0.33	-0.35	-0.28
13 (キビキビした動き)	-0.22	-0.21	-0.22
14 (体力作り)	0.20	0.14	0.32 **
15 (協力の習慣)	0.11	0.04	0.25 ***
16 (基本的理論の学習)	-0.18	-0.22	-0.11
17 (堂々ががんばる習慣)	-0.17	-0.20	-0.12
18 (明朗活発な性格)	0.04	0.01	0.11
19 (授業のまとまり)	0.11	0.07	0.21 *
20 (授業の印象)	-0.06	-0.06	-0.05
21 (みんなの活動)	0.41	0.31	0.60 ***
22 (授業のねらい)	0.17	0.11	0.27 **
23 (永続的な仲間)	0.45	0.42	0.50
24 (教師の存在価値)	0.24	0.13	0.46 ***
25 (体育科目の必要性)	0.28	0.26	0.31
26 (理論と実践の統一)	0.12	0.04	0.27 ***
27 (チームワークの発展)	0.26	0.16	0.45 ***
28 (主体的人間の育成)	0.57	0.52	0.66 **
29 (利己主義の抑制)	0.45	0.39	0.57 **
30 (みんなの喜び)	0.30	0.26	0.37
喜び尺度得点	3.13	3.11	3.21
評価尺度得点	-0.76	-1.08	-0.14 *
価値尺度得点	3.24	2.61	4.46 ***
態度得点	5.70	4.46	7.52 **

***P<0.001, **P<0.01, *P<0.05

全体としては喜びが苦しみよりも多く、心身の緊張を解し、友達をつくる場や、集団活動の楽しみを与えてくれるとしていた。高校の体育同様、女子は集団活動や友達をつくる場としての評価が男子よりも高いが、授業時間数に関しては多すぎると回答するものが多かった。

2) 授業に対する評価

体育授業の内容に対する評価尺度得点は男子-1.08, 女子-0.14と男女とも非好意的な傾向がみられ、男子のほうが女子よりも有意に得点が低く非好意的であった ($p<0.05$)。全体でも高校よりも有意に得点の低い-0.76であった ($p<0.05$)。

項目別でも高校同様の傾向がみられ、14「体力作り」に関しては得点が高かったものの、11「深い感動」、12「精神力の養成」、13「キビキビした動き」、16「基本的理論の学習」、17「堂々ががんばる習慣」において得点が低かった。

男女別では、14「体力作り」($p<0.01$)、15「協力の習慣」($p<0.001$)、19「授業のまとまり」($p<0.05$)に関して、女子が男子に比べ高く評価していた。

大学の体育の授業内容に対する評価としては、高校の体育同様体力作りには役立つものの、理論の学習や精神力、キビキビした動きなど多くの面での評価は低かった。

3) 授業に対する価値観

授業に対する価値尺度得点は3.24と好意的な傾向がみられ、その傾向は男子 (2.61) に比べ女子 (4.46) に強かった ($p<0.001$)。

項目別にもすべて得点は好意的であった。なかでも21「みんなの活動」(0.41)、23「永続的な仲間」(0.45)、28「主体的人間の育成」(0.57)、29「利己主義の抑制」(0.45)、30「みんなの喜び」(0.30)の項目で得点が高かった。全体の活動としての体育の授業に対する価値への評価が高かったようである。この傾向は特に女子に強く、21「みんなの活動」、22「授業のねらい」、24「教師の存在価値」、26「理論と実践の統一」、27「チームワークの発展」、28「主体的人間の育成」、29「利己主義の抑制」の10項目中7項目で男子より女子の方が得点が高く好意的であった。

3. 高校と大学の体育の授業に対する態度の比較

高校と大学の体育の授業に対する態度得点の比較は表3のとおりであった。まず、態度得点と3尺度得点を大学と高校の間で比較した。態度得点は高校5.61、大学5.70とわずかに大学の方が得点が高かったものの両者の間に有意な差はなかった。全体としては、学生の体育に対する態度は高校の体育に対しても大学の一般体育に対しても大きな差はなかったといえる。

次に3つの尺度ごとに比較をした。喜び尺度得点は高校3.19、大学3.13と両者の得点の間に有意な差はなくどちらも好意的であった。評価尺度得点は男女とも大学の方が得点が低く、全体では高校-0.44、大学-0.76と大学の方が有意に得点が低かった。授業の内容に対する評価は大学の授業は高校の授業よりも学生の評価は低かった。大学の授業内容に対する検討が必要であると考えられる。それに対して、逆に価値尺度得点全体では高校2.94、大学3.24と大学の方が有意に得点が高かった ($p<0.05$)。男女とも大学の方が得点が高かったが、男子には有意差はみられなかった。

体育の授業に対する学生の態度は全体としては高校と大学の間には差はみられなかったものの、大学の体育の授業は価値尺度に関しては高校よりも評価が高いものの、授業内容に対する評価の点では高校の体育の授業よりも低かった。

さらに、各項目毎に大学と高校の間で評価に有意な差のあった項目を見ていく。まず、高校の体育よりも大学の体育の方が得点が高く態度が好意的であった項目についてみた。大学体育の方が好意的であった項目は喜び尺度の中の2「友達をつくる場」、10「喜びより苦しみ」、

表3. 高校と大学の体育に対する態度の比較

項 目 名			男 子		女 子	
	高 校	大 学	高 校	大 学	高 校	大 学
1 (快い興奮)	0.42	0.29 ***	0.41	0.26 ***	0.45	0.35 *
2 (友達をつくる場)	0.43	0.50 **	0.42	0.45	0.43	0.59 ***
3 (生活のうるおい)	0.38	0.29 **	0.40	0.29 **	0.34	0.31
4 (授業時間数)	0.07	0.10	0.16	0.20	-0.11	-0.09
5 (集団生活の楽しみ)	0.62	0.58	0.62	0.55 **	0.62	0.65
6 (体育科目の価値)	0.25	0.24	0.32	0.27	0.12	0.20
7 (心身の緊張をほぐす)	0.51	0.47	0.53	0.48	0.48	0.46
8 (自主的思考と活動)	0.04	0.07	0.04	0.08	0.04	0.05
9 (積極的活動)	0.04	0.01	0.05	-0.01	0.02	0.07
10 (喜びより苦しみ)	0.45	0.57 ***	0.46	0.55 **	0.43	0.62 ***
11 (深い感動)	-0.15	-0.28 ***	-0.20	-0.30 ***	-0.05	-0.25 ***
12 (精神力の養成)	-0.29	-0.33	-0.32	-0.35	-0.23	-0.28
13 (キビキビした動き)	-0.24	-0.22	-0.21	-0.21	-0.28	-0.22
14 (体力作り)	0.22	0.20	0.17	0.14	0.31	0.32
15 (協力の習慣)	0.09	0.11	0.03	0.04	0.21	0.25
16 (基本的理論の学習)	-0.19	-0.18	-0.20	-0.22	-0.18	-0.11
17 (堂々がんばる習慣)	-0.12	-0.17 *	-0.13	-0.20 *	-0.08	-0.12
18 (明朗活発な性格)	-0.06	0.04 ***	-0.09	0.01 ***	0.02	0.11 *
19 (授業のまとまり)	0.22	0.11 ***	0.19	0.07 **	0.29	0.21
20 (授業の印象)	0.07	-0.06 ***	0.01	-0.06	0.19	-0.05 ***
21 (みんなの活動)	0.18	0.41 ***	0.11	0.31 ***	0.29	0.60 ***
22 (授業のねらい)	0.21	0.17	0.14	0.11	0.32	0.27
23 (永続的な仲間)	0.53	0.45 ***	0.50	0.42 **	0.60	0.50 *
24 (教師の存在価値)	0.29	0.24	0.21	0.13 *	0.46	0.46
25 (体育科目の必要性)	0.38	0.28 ***	0.34	0.26 *	0.47	0.31 **
26 (理論と実践の統一)	0.08	0.12	-0.01	0.04	0.26	0.27
27 (チームワークの発展)	0.30	0.26	0.21	0.16	0.48	0.45
28 (主体的人間の育成)	0.53	0.57	0.50	0.52	0.58	0.66 *
29 (利己主義の抑制)	0.35	0.45 ***	0.31	0.39 **	0.43	0.57 ***
30 (みんなの喜び)	0.08	0.30 ***	0.07	0.26 ***	0.11	0.37 ***
喜び尺度得点	3.19	3.13	3.41	3.11	2.85	3.21
評価尺度得点	-0.44	-0.76 *	-0.77	-1.08	0.21	-0.14
価値尺度得点	2.94	3.24 *	2.39	2.61	4.00	4.46 *
態度得点	5.61	5.70	5.03	4.46	7.06	7.52

***P<0.001, **P<0.01, *P<0.05

評価尺度の18「明朗活発な性格」、価値尺度の21「みんなの活動」、28「主体的人間の育成」、29「利己主義の抑制」の6項目であった。

逆に大学の方が得点が低く、非好意的であった項目は喜び尺度の1「快い興奮」、3「生活の潤い」、5「集団活動の楽しみ」、評価尺度の11「深い感動」、17「堂々がんばる習慣」、19「授業のまとまり」、20「授業の印象」、価値尺度の21「みんなの活動」、23「永続的な仲間」、25「体育科目の必要性」の10項目であった。

大学の体育は高校に比べ、苦しみが減ったものの快い興奮や深い感動を感じることもなくなっている。また、高校のときに比べ、能力の高い人など特定な人だけが喜びを得られるものではなくみんなの活動であり、明るい性格をつくることができる。しかし、体育の場の仲間は高校のときよりもその場限りであり、授業のまとまりや印象が少なく、課外で運動できる環境が多く高校のときほど体育は必要ではないと考えているものも増えている。

大学体育では高校までに学んだ技術を用いて、主として球技のゲームを中心に授業が行われることが多く、課題をもって練習することが少なくなってくる。その結果みんな楽しんで、苦しみの少ないものと評価を受けている反面、まとまりに乏しく、困難な課題を達成したり、技術の向上を体感することによる深い感動などが得られなくなっていると考えられる。大学体育としては、学生の楽しさを失わせることなく、内容面での充実を計っていくことが必要であろう。

IV. ま と め

大学の一般体育を改革してゆく上での資料とするために、大学生の体育の授業に対する態度を調査した。さらに、高校の体育の授業に対する態度と比較検討することによって大学体育の問題点を明らかにしようとした。その結果次のような点が明らかになった。

1. 体育に対する態度は高校大学とも好意的でありその傾向は男子よりも女子の方が強かった。
2. 男子は喜びは大きいものの、授業内容に対する評価は低かった。女子は喜びは男子よりも低いものの、授業内容に対する評価は高く、価値も男子よりも高く認めていた。
3. 大学の体育の授業に対して学生は高校の体育に比べ、みんなの活動であり、友達をつくる場とし評価でき、苦しみよりも喜びが多いものの、まとまりや印象に乏しく、快い興奮や深い感動が少ないと感じていた。
大学体育は今後、学生の喜びを減らすことなく感動を得られるよう、内容の検討が必要であると考えられる。

参考文献

- 1) 桑野 豊他：パス解析によるスポーツ参与の分析，筑波大学体育紀要，第2巻：23-30，1979
- 2) 西村 覚：健康のための運動志向への動機づけ—テニス教室による場合—，筑波大学体育科学系修士論文，1989
- 3) 小林 篤他：態度測定による体育の授業診断の手引，体育科教育，第22巻，第4号：p.32-41，1974
- 4) 小林 篤他：よろこびを育てるということ，体育科教育，第22巻，第5号：p.30-36，1974